

武田信玄（大槻磐溪）

驚倒す 暗中 銃丸の 跳るを

野田城上 笛声 寒し

誰か 知らん 七十二の 疑塚

一棺の 湖底 安きに 若かず

驚倒暗中跳銃丸 野田城上笛聲寒
誰知七十二疑塚 不若一棺湖底安

解説 信玄の笛を好むのを知っていた菅沼定盈は、野田城を包囲された夜、城中で名笛を吹かせ、堀端へ信玄が忍び寄るのを狙撃した。信玄の死を秘密裏に処理したことを詠った詩。

語釈 ※驚倒Ⅱ非常に驚くこと。※暗中Ⅱ暗がりの中。※銃丸Ⅱ銃の弾丸。※野田城Ⅱ愛知県新城市にある城。※七十二疑塚Ⅱ曹操は偽の墓を七十二個作り、墓荒らしに自分の墓がやられないようにした。※不若安Ⅱ中国、春秋時代、晋・宋・斉など十二国の連合軍が、鄭へ攻め入ろうとした。鄭は急ぎ晋へ和睦を願ひ、晋はこれを受け入れ、他の国も進軍止めた。鄭は晋へお礼として貢物を贈り、晋王は、財物を家臣に分け様としたが、家臣の魏縫は固辞し、国王へ「晋国が順調な時だからこそ、常に将来の危険を思い起こすべきだ。警戒心があれば準備でき、有事に備えて危機を避ける事が出来る」と直訴した。備えの重要性を説いた「安きにありて危うきを思う」は、防災や危機管理の心構えを表現した成語である。

通釈 笛の音につられて野田城に近づいた信玄は狙撃され逝去した。武田勢はこの傷の悪化による信玄の死を隠し、甲州に引き上げる途中、諏訪湖の水底に石棺を沈めた。そして、魏の曹操にならない七十二の疑塚を建て、そして、故事に従い、発見が困難であろうと石棺を湖底に沈めた。